

政務活動調査報告書

調査日 平成27年2月2日~2月4日

調査内容

温海温泉の街づくりについて (山形県鶴岡市)

酒田市の観光施設の視察(山形県酒田市)

東京ドーム、テーブルウェアフェスティバル(東京都)

報告者 大島恒典

参加者 田中政司・大島恒典・辻浩一・川内聖二

調査理由

嬉野温泉では、バブル経済の衰退や旅行形態の変化により、観光客数が年々減少し宿泊施設や商店街の店舗数がピーク時の半数以下になっているのが現状である。このことは全国の温泉観光地において共通する問題と考え、今回温泉街の復活へ向けたあつみ温泉の取り組みについて視察を行った。

視察場所 山形県鶴岡市 あつみ温泉(鶴岡市温海庁舎及び市街地)

視察日 平成27年2月2日

あつみ温泉の概要

人口14万人の鶴岡市は、山形県の南西に位置し、平成10年に1市4町1村が合併し面積1300K平方メートルで東北一の広さを有している、この鶴岡市の地域の一つが旧温海地区で人口が、約9,600人の町である。

平成2年のピーク時には、観光客が約35万人で平成7年には、「にっぽんの温泉100選」4位になった実績もある、しかしバブル経済の崩壊などで観光客数は年々減少し、平成22年度には12万6千人にまで落ち込み地元関係者の間に危機感が抱かれるようになった。

あつみ温泉の街づくりについて ~あるいて楽しい温泉街を目指して~

・温泉客の減少と一つの転機

平成12年に当時、山形県の観光アドバイザーだった東京大学の堀繁氏を講師に招き、

「湯の街景観整備講演会」を開催された。この講演会で堀教授から、あつみ温泉衰退は町の魅力を作ってこなかったことが最大の原因との厳しい指摘がされた。このことを受け「あつみ温泉魅力づくり推進委員会」が組織され観光団体や行政一体となって「あるいて楽しい温泉街」を目標とした街づくりが展開されている。

主だった事業

・湯の街リフレッシュ事業

基本コンセプトを、温泉情緒の演出・ホスピタリティ表現(人優先のまちづくり)と目標を定め、平成12年に基本構想、14年度に湯の街リフレッシュ事業として、歩道の段差解消・道路中央部に足湯、ベンチ、樹木の植栽・橋の欄干を透過性に配慮した構造にするなどの事業が行われた。

・あつみ温泉活性化施設整備事業

あつみ温泉活性化施設整備事業は廃止された民間保養所を改装し町歩きの拠点として整備された。町の情報発信地とし訪れた人を楽しめる場所を提供し、その様子を通り全体にしみださせにぎわいを創出することを目的とされている。施設内には地元の名産品の販売や足湯カフェが設置されている、この施設は購入や改装費含め7,000万円ほどかかっているが、最終的に民間のまちづくりグループに無償で譲られており、現在では制約に縛られず商品の販売等施設をフル活用した運営が行われている。

・やすらぎの川整備事業

県の事業で、やすらぎの川整備事業とし護岸整備が行われている。6か所の施設の整備工事を施工し各施設にはそれぞれ愛称をつけて観光客に利用いただき、町のイベント時などにも利用されている。

1.「ざっこ見の腰掛」 2.「かじかの下り口」かじか川への昇降階段 3.「もっけいゆ湯」足湯 4.「湯涼みの腰掛」ベンチ 5.「竿かけのテラス」昇降階段を兼ねてのベンチ 6.「映し見の腰掛」ベンチ 等である、施設のほとんどは街歩きが基本となっており休憩所として利用できるようなつうてある。

・くらしの道ゾーン整備事業

くらしの道ゾーン整備事業は平成15年に国土交通省の歩行者、自転車の優先施策に取り組む事業として全国より募集が行われ、応募の結果全国42地区の一つとして登録されている、合わせてスーパーモデル地区の募集もあり平成17年3月に指定を受けられている。スーパーモデル地区指定の以前から要望されていた無電柱化の要望も相手にされていなかったが指定後、電線管理者である東北電力とNTTとの協議を行い、合意

するまで一年がかりではあったが、国と県の補助により無事完了したとのことであった。もう一つは道路の一方通行化の問題であった、これに関しては、地元の旅館などより反対の声が上がったが、このままでは生き残れないとの説得で了解をいただき整備を行ったとのことであった。

視察しての感想

今回、鶴岡市のあつみ温泉を視察して感じたのは観光客が少なく閑散としていたことであった。聞くところによれば東北の温泉地は冬場ではなく春から夏そして紅葉の時期がもっとも繁忙期であり冬場の観光客は少ないとのことであり私がイメージしていた寒い雪景色の中、温泉であったまるといった想像は少数派で、現実的に観光客の集客には向かないと感じたところである。

そういう状況の中あつみ温泉ににぎわいを取り戻そうとアドバイザーに東大教授の堀氏を迎え、ハード・ソフト面の指導を受けながら「あるいて楽しい街づくり」を目指して、官・民一体となった取り組みがされておりこの間に公共事業でハード整備事業をおこなった影響で住民の意識が変わり、新しく整備した道路の清掃や商工会が中心になり様々なイベントにも取り込まれるようになったとのことであった。

観光施策はしっかりとしたコンセプトを定め、行政がイニシアチブをとり民間も巻き込んでゆくことが重要だと感じたところであり当市でも参考になる部分があると考え

る。
最後に担当の方が目指すは湯布院と言っておられたが東北の温泉にはもっと違った魅力を考えていけば集客も可能ではないかと考えた。

酒田市の観光施設の視察（山形県酒田市）

視察日 平成27年2月3日

視察場所 山居倉庫 自然を利用した低温管理倉庫

施設の概要

明治26年に酒田米穀取引所の倉庫とし旧庄内藩酒井家により建造され、明治30年まで14棟建てられ酒田家が管理、運営を行った。倉庫の作りは土蔵造りで建物の基礎下には軟弱地盤対策として杭木を打ち込み地盤対策を行っている、これにより明治27年の庄内地震（マグニチュード7）に耐え損害は僅かなものであった。

又、建物は屋根を二重構造とし断熱効果を考慮し土間には、にがりを混ぜた土で固められ土間全体に温度と湿度を一定に保つように塩を敷き均してある。外工は防風対策と

して冬季の厳しい季節風から倉庫を守るため、樺が植樹されている。

しかし、昭和14年に取引所は、米穀配給統制法により廃止されたがその後、全国農業組合連合会庄内本部とし現在まで運用されている。

視察場所 相馬楼

施設の概要

江戸時代より料亭（相馬屋）としてにぎわっていた建物で、現在残る木造の母屋は、明治27年の庄内地震の大火で焼失した直後、残った土蔵を取り囲んで建てられたもので、平成8年11月、国の登録文化財建造物に指定されている。

修復した相馬楼は、1階の20畳部屋を「茶房くつろぎ処」とし、2階の大広間は舞子さんの踊りとお食事を楽しむ演舞場に、かつての厨房は相馬楼酒田舞妓のけいこ場となっている。

又、楼内の土蔵にはひな人形や楼主、新田嘉一所有の書画や古美術などを展示しており、我々が視察した時には「竹久夢二美術館」が開館されていた。

視察しての感想

山形県酒田市は江戸時代より北前船の寄港地として繁栄してきた歴史を持っており庄内米の備蓄基地である山居倉庫や、京文化でもある舞妓文化が伝えられたものと考えられる。今回の視察は飛び込みの視察で山居倉庫については併設している博物館が休館で非常に残念であったがちょうど倉庫内より米の出庫の作業が行われており、歴史的建造物が現代にも活躍していることに感動した。

相馬楼については、国の登録文化財建造物に指定されており、その建物を有効に活用されていた。京都から伝わった舞妓文化を伝えていくために一般女性を採用して、その練習風景などを観光客が見学できるようになっており非常に面白い取り組みで参考になった。

当市においても湯の端座の計画があり実現には至らなかったが嬉野温泉の歴史でもある芸妓文化をどのように残していくべきか再考してみる必要があると感じた。